

Title	聖トマス・アキナス著：真理と虚偽に就いて(神学大全第十六、七論題)
Sub Title	Translation: St. Thomas; "DE VERITATE" and "DE FALSITAS"
Author	箕輪, 秀二(Minowa, Shuji)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1955
Jtitle	哲學 No.31 (1955. 3) ,p.143- 189
JaLC DOI	
Abstract	This is the translation of the "DE VERITATE" and the "DE FALSITAS" in the Summa Theologica by St Thomas, Firstly, in these two "Quaestiones", St Thomas gives us the philosophical and ontological definitions about the truth and the falsehood, and also he shows the difference between the "Veritas rei" and the "Veritas intellect", ie, "Truth in things" and "Truth in judgement". At a glance, it seems strange for us to find these "Quaestiones" in his theologia, not in Ontologia. But his Theologia is really his unique Ontologia, therefore he treats about these problems from the ontological point of view. Secondly, we can find out the essence of the philosophy of St Thomas in the later chapters of these "Quaestiones", i. e, the "Intellectualism of St, Thomas". We can describe his definitions of the truth and the falsehood as follows; "Veritas principaliter est in intellectu, secundario in rebus, in ordine ad intellectum, a quo dependet". "Veritas est adaequatio rei et intellectus" "..... ubi primo est veritas, ibi primo falsitas; ergo falsitas est in intellectu, et non in rebus nisi in ordine ad intellectum, . . . . . ergo falsitas secundum quid rei consistit in difformitate ad intellectum per accidens; ergo a quo dependet". Of course, his epistemology is different from the modern ones developed since Renaissance, but we must deeply appreciate his interpretation of the ontological truth and the falsehood, though it clothed the medieval colours.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000031-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000031-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

聖トマス・アキィナス著

## 真理と虚偽に就いて

〔神学大全第十六、七論題〕

箕輪秀二訳

### 真理に就いて（第十六論題）

智識 (Scientia) は真なるものにのみ関するものであるが故に、神の智識に關しての考察に續いて真理に就いて考察されねばならない。

之れに關して次の八つの点が追求される。

- (一)、真理は事物の裡に存するや智性の裡に存するや否や。
- (二)、真理は総合的、分析的智性<sup>(註)</sup>の裡にのみ存するや否や。
- (三)、真なるものの存在との關係に就いて。
- (四)、真なるものの善との關係に就いて。
- (五)、神は真理なりや否や。
- (六)、あらゆる事物は唯一つの真理によつて存在するや、或いは多数の真理によつて存在するや否や。

真理と虚偽に就いて

(七)、真理の永遠性に就いて。

■(八)、真理の不変性に就いて。

## 第一章 真理は智性の裡にのみ存在するや否や

第一章に就いては次の如くに進められる。

(一)、真理は智性の裡にのみ存在するのではなく、むしろ事物の裡に存在すると考えられる。と云うのは、アウグスティニスは「独白録」二で「真なるものは見られるものである」と云う真なるものの定義を拒否して居るから。何となればこれ(定義)に従えば、地の内奥に隠れて居る石は見られないが故に、真の石でないことになろうから。又彼は次の(命題)即ち「真なるものは、知る事を欲し、又知る事の出来る認識者に現われるが如くに存在する」を拒否して居る。と云うのは之れに従えば、存在を知り得ないとするならば、真なるものは何ら存在しないと云う事になるであらうから。

(二)、更に、真なる如何なるものも、真理の理<sup>(註一)</sup>拠によつて真となるのである。それ故に若し真理が智性の裡にのみ存在するならば、たゞ認識されることを条件としなければ、如何なるものも真なるものとはならないであろう。これが、「形而上学」十一に於いて明らかなように、「見られるところのものはすべて真である」と云つた古代の学者の誤<sup>(註二)</sup>謬である。従つて諸矛盾も各々異なつた人によつて同時に真であると考えられるが故に、諸矛盾も又同時に真となり得るのである。

(三)、更に、「事物が斯くあると云う原因はその事物より高度に於いて、かゝるものである」<sup>(註四)</sup>とアリストテレスは

「分析論後篇」に於いて云つてゐる。

ところで「範疇論」<sup>(註五)</sup>に於けるアリストテレスに従えば、「我々の意見や、論述が真となり偽となるのは、事物が存在するか或いは存在していないと云うことに由るのである。」それ故に真理は智性の裡よりはむしろ事物の裡に存在する。

之れに対してアリストテレスは「形而上学」六に於いて「真理や虚偽は事物の裡ではなく、智性の裡に存在する」と云つて居る。

之れに対して次の様に答えて云うべきである。意欲がむこうところのものを善なるものと名付ける如くに、智性がむこうところのものを真なるものと名付けるのである。ところで意欲と、智性或いはすべて認識すると云うことの間には次の様な差異がある。即ち、認識は認識者の裡に存在する認識されたものに依存するのであるが、意欲は意欲されるものにむこう意欲者に依存するのである。この様に意欲の目的―それは善なるもの―は意欲され得る対象の裡に存在するのであるが、認識の目的―それは真なるもの―は智性自身の裡に存在するのである。

ところで事物が意欲との関係を持つ限り、善なるものは事物の裡に存在するのである。従つて対象が善なるものであるならば意欲は善なるものであると呼ばれ、その限り善の理拠は意欲され得る事物から生じて来るのである。

同様に真なるものは智性が認識された事物に一致適合させられる限り智性の裡に存在するが故に、真なるものの理

扱は認識された事物に対する智性から生ずると云う事は当然である。それ故に又認識された事物は、智性と或る關係を持つ限り真であると云われるのである。

さて認識された事物は、智性に対して或る關係を必然的にか偶然のにか持つて居る。この事物がそれ自身の存在上 (secundum suum esse) 依存するところの智性に対しては必然的な關係を持つのであるが、然し偶性的な關係をそれによつて事物が認識され得るところの智性に対して持つのである。<sup>(註六)</sup>これは恰かも我々が、「家は必然的に製作者の智性に関係する」と云い得るが、この家が (その存在に関して) 依存して居ない智性に対しては偶性的にしか關係しない<sup>(註六)</sup>と云うのと同様の事である。

さて事物に就いての判断はその事物の裡に偶性的に存在するものによつてでなく、その事物の裡に必然的に内在するものによつてなされるのである。それ故にすべてのものは、それに依存するところの智性に関係させられる限り絶対的に真と云われるのである。かくて、造られた事物は我々の智性との關係によつて真と云われるのである。と云うのは、製作者の精神の裡に存在する形相の似像 (similitudo) <sup>(註六)</sup>を表現して居る家は真であると云われるのであるから。そして論述 (oratio) はそれらが智性の裡に於ける真なるものの徴 (signum) <sup>(註七)</sup>である限り真と云われるのである。

同様に自然物はそれらが神の精神の裡に存在する形相 (species) の似像を表現して居る限り真であると云われるのである。何となれば神の智性の裡に先在する概念に従つて、小石の固有の本性を表現する小石は真と云われるからである。かくの如くして真理は本来的には智性の裡に存在するのであり、二義的には、それらの源泉としての智性<sup>(註七)</sup>に關係させられる限り事物の裡に存在するのである。

上述の事からして、真理は種々の仕方<sup>(註八)</sup>で理解される。アウグスティヌスは「真正宗教論」に於いて「それによつて、

存在するものが明らかにされるものが真理である」と云い又、ヒラリウスは「三位一体論」五に云う「真なるものは存在を解明するものであり明確にするものである」と。之れは智性の裡に存在する限りの真理に属するのである。ところで智性との関係に於いての事物の真理に対しては、アウグスティニスの「真正宗教論」に於ける定義——「真理とは如何なる非似像(dissimilitudo)をも含まない原理への確固たる似像である」——が属するのである。又「真理論」に於けるアンセルムスの或る定義——「真理とはたゞ精神によつてのみ認知され得る誠実である」何とならば原理に一致するものは誠実なものであるから——が属する。又アヴィチンナの定義——「すべての事物の真理は事物に不変的に存するところの存在の本性である」も属する。ところで「真理は事物と智性との適合一致である」<sup>(註九)</sup>と云われることは、その何れの観点に於いても適用し得るのである。

それ故に第一の反論に対しては次の様に答えて云うべきである。アウグスティニスは事物の真理に就いて論じて居るのである。そしてかゝる真理の概念から我々の智性との関係を排除して居るのである。と云うのは偶性的なものはすべての定義から排除されるからである。

第二の反論に対しては次の如くに云うべきである。古代の哲学者は自然物の形相は何ら智性からは発出(procedere)しないが然し偶然にこれから出て来る(Provenir)と主張した。<sup>(註一〇)</sup>そして真なるものは智性との関係を含んで居ると考えたが故に、事物の真理を我々の智性に基づけざるを得なくなつたのである。こゝからからしてアリストテレスが「形而上学」四に於いて追求したる不一致が結果したのである。だが然し我々が事物の真理が神の智性との関係に於いて成立すると云うならば、かゝる不一致は生じないのである。

第三の反論に対して次の様に云うべきである。我々の智性の真理は事物から原因されるけれども、然しながら真理の理拠は事物の裡に、より先きに (*per prius*) 見出されると云う事では決してないのである。恰かも薬の裡に健康の理拠が動物の裡に在るよりも優れて見出されない様に。何とならば、薬は一義的に働くものでないが故に、その薬の健康がでなく薬の力が健康を惹き起すからである。同様に事物の存在は——その真理ではなく——智性の真理を惹き起すのである。それ故にアリストテレスは「意見や論述は事物が存在すると云うことから真と云われるのであつて、事物が真であると云う事からでない」と云つて居る。

(註一) 第二章註一参照。

(註二) *ratio* 理拠と訳したが概念と考えた方が解り易い。

(註三) 古代の観念論者を指す——特にプラトンの誤謬を云う。尚これらのトマスの批判に就いては *S. Theologica Ia. I<sup>a</sup>. q. 84. a 1* 参照。

(註四) 原文は *propter quod unumquodque, et illud magis...* (1 post. cap 2) となつてゐる。之れは結果の裡にある性質は、原因の裡により多く内含されてゐると云う事を示す。

(註五) *Prædecamenta*, (cap 5).

(註六) "*secundum suum esse*" に事物が依存するのは神であるからしてこの智性は又神の智性を意味する。従つて神の智性に対しては事物は *per se* の関係を持つのである。それ故又可認識性によつて *per accidens* に事物が係わるのは人間智性なのである。

(註七) 註六参照。

(註八) 此處でトマスは諸哲学者の定義を挙げ真理概念を規定してゐる。事物の真理 (*Veritas rei*) と智性の真理 (*Veritas intellectus*) を分別し古代からの定義 "*Veritas est adequatio rei et intellectus*" をその何れにも妥当するものとして取上げてゐる。この定義は真理論全体に流れる観念であり、この分別はトマス認識論に於いて重要な意義を持つのである。

尚 "*de Veritate*" に於いては真理及び真なるものの、よつてもつて定義される原因を三つあげてゐるが、ここに於いて明確

に事物の真理と智性の真理を区別し、そしてかしこに於いて第二のものとして挙げた定義（一致、合形相性）を真理の厳密な意味での定義として採用している。

de Veritate. q. 1. a. 1. c 参照

de Veritate に於ける前述の三点を挙げて見る。

1. 真理に先行するものに従つて。—アヴィチンナの「真なるものはあるところのものである。」—（事物の真理）
2. その裡に可知的決定が形相的に完成されるものに従つて。—イザークの（真理は事物と智性との一致）
3. そこから結果して来るものに従つて。—アヴグスティヌスのそれに依つて存在するものを明確にし明白にするものである。

—（智性の真理）

（註九） トマスがイザークに帰せられると考えたこの真理の定義は幾多の中世哲学研究家、トマス研究家によつて、イザークの著作中の何処に見出されない事は明白となつてゐる。

（註一〇） S. Theologica 1<sup>a</sup>. 1<sup>a</sup>. q. 2. a. 2. 参照。

## 第二章 真理は総合的、分析的智性の裡にのみ存在するや否や<sup>（註一）</sup>

第二章に対して次の如くに追求される。

（一）、真理は総合的、分析的智性の裡にのみ存在しないと考えられる。何となればアリストテレスは「靈魂論」三に於いて次の如く云つて居る。「感覚はそれ固有の感覚的対象に關しては常に真である如く、智性も又事物の本質に關しては常に真である」と。ところで綜合や分析は感覚の裡にも本質を知る智性の裡にも存在しないのである。それ故に真理は総合的、分析的智性の裡にのみ存在しないのである。

（二）、更に、イザークは其著「定義論」に於いて、「真理は事物と智性との適合一致である<sup>（註二）</sup>」と云つて居る。ところで合成者の智性が事物に適合され得る如くに、非合成物に關する智性も同様適合され得るのである。そしてこれは



又實際に存在するがまゝに事物を智覚する感覚に於いても同様真である。それ故真理は総合的、分析的智性の裡にのみ存在しない。

之れに対して次の反論がある。即ち、アリストテレスは「形而上学」六で、「單純なるものや事物の本質に關しては、事物の裡にも智性の裡にも真理は存在しないのである」と云つて居る。

之れらに対して次の様に答えて云うべきである。上述したる如く、真なるものはその第一の観点からすれば智性の裡に存在する。<sup>(註四)</sup>ところであらゆる事物は自己の本性に固有の形相を持つ限り真であるが故に、認識するものとしての智性は認識されたる事物の似像を持つ限り真であることは当然であり、之れは認識者としての認識者の形式である。

かゝる理由からして真理は智性と事物との一致と云う事によつて定義づけられるのである。それ故この一致を知ることは真理を知る事である。ところで感覚は如何なる仕方でもこの一致を知る事は出来ない。と云うのは視覚は可視的な対象を持つて居るが、然し視られた事物と、視覚自身がその対象に就いて知るところのものとの間に存在する關係を知らないからである。然るに智性は可知的事物と自身との一致を知る事が出来るのである。然し智性はこの一致を事物の本質を知る事によつて知るのではなく、むしろ智性が事物に就いて知るところの形相に適合すると智性が判断するとき、初めて真なるものを認識するのであり真であると云うのである。之れを智性は綜合することや分析することによつてなすのである。と云うのは、智性はあらゆる命題に於いて述語によつて表わされた或る形相を、主語によつて表わされた或る事物に適用するか若しくは引き離すかであるから。それ故感覚は与えられた事物に就いては真で

あり智性は本質の認識に就いては真であると云うことは自明な事である。が然しそれによつて智性は真理を認識し又それを肯定するのではないのである。この事は同様の意味で、合成された言葉 (vox) や合成されない言葉に就いても云われるのである。かくて真理は感覚の裡にか或いは事物の本質を知らんとする智性の裡に存在し得るのである。然しこれは勿論単なる事物の裡に於いてとしてであつて、未だ認識された事物として認識者の裡にあるのではない。この事は真理と云う言葉によつて内含されて居る事なのである。と云うのは智性の完成は知られたものとして真なるものであるからである。それ故に真理は本来的に云うならば、総合的、分析的智性の裡にあつて感覚や本質を知る智性の裡には存在しないのである。<sup>(註五)</sup>

上述により反論に対する解答は明白である。

(註一) 分析的、総合的智性 (componente et dividente intellectus) とは判断智性を云う。綜合に於いて肯定を、分析に於いて否定を智性はなす。従つて之れは「判断する智性 (judicium) の裡に真理は存すや」と云う事になる。

(註二) "quod quid est"、或るものが何であるか即ち「本質」を指す。

(註三) 一章 (註九) 参照。

(註四) 一章参照。

(註五) 一章に於いて見たる真理の定義及び註を比較考量されたし。

### 第三章 真なるものは存在と置換されるや否や。

第三章に対しては次の如く進められる。

(一) 真なるものは存在と置換されないと考えられる。と云うのは上述したる如く、<sup>(註二)</sup> 真なるものは本来的には智性

の裡に存在し、存在は本来的に事物の裡に存在するからである。故にこれらは置換されない。

(二)、更に、存在や非存在に及ぶところのものは存在とは置換されない。ところで真なるものは存在や非存在に及ぶのである。何となれば、在るものは在るのであり、ないものは存在しないと云う事は真であるから。それ故に真なるものは存在と置換されない。

(三)、更に、相互に前後関係にあるものは置換されないと考えられる。ところで真なるものは存在より先きであると考えられる。何となれば、真なるものの概念に於いてのみ存在は認識されるが故にである。それ故、これらは置換し得るもの (convertibilia) とは考えられない。

之れに対してアリストテレスは「形而上学」二に於いて「存在や真理に於ける事物の状態は同一である」と云つて居る。

之れに対して答えて云うべきである。善なるものが意欲され得る本性を持つて居るが如く、真なるものは認識に対する関係を持つて居る。ところで存在を持つ限り、すべてのものはその限り知られ得るのである。こゝからして「靈魂論」に於いて「精神は感覚や智性によつて或る意味ですべてである」<sup>(註二)</sup>と云われて居る。それ故に善なるものが存在と置換される如く、真なるものも存在と置換されるのである。然し善なるものが存在に意欲され得るものの概念を附加する如くに、真なるものは智性に対する関係をこれに附加するのである。

それ故第一の反論に対して次の如く云うべきである。上述したる如く、<sup>(註三)</sup>真なるものは智性と事物の裡に存在する。ところで事物の裡に存する真なるものは実体的に (*secundum substantiam*) 存在と置換されるが、智性の裡に存する真なるものは、明らかにされたものが、明らかにすることと置換されるが如くに存在と置換されるのである。何となればこの事は上述したる如く真なるものの本性に属する事であるから。真なるものと同様存在も又事物の裡に存在すると云われ得るにしても真なるものは本来的に智性の裡に存在し、存在は事物の裡に存在するのである。この事は真なるものと存在とがその理拠によつて異なるがために生ずる事なのである。

第二の反論に対して云うべきである。非存在は自らの裡にそれによつて知られる何物を持つて居ない。が智性が非存在を可知的なものとなす限り非存在は知られるのである。それ故に真なるものは非存在が或る概念的存在である限り、即ち理性 (*ratio*) によつて非存在として知解されたるものである限り、存在に基づけられるのである。<sup>(註五)</sup>

第三の反論に対して云うべきである。存在は真なるものの概念なしには把握され得ないと云われる場合、二つの意味に理解されるのである。その一つは存在の知解を結果する真なるものの概念がなければ存在は把握されないと云う事である。そしてかゝる議論は真理である。他の意味では真なるものであると云う概念が知解されなければ存在は把握されないと云う事である。之れは虚偽でありむしろ反対に真なるものは存在の概念なしには把握できないのである。と云うのは真なるものの概念に存在は入り込んで居るからである。我々が可知的なるものを存在と比較する場合にも同じ事である。と云うのは存在が可知的なものでなければ認識され得ないからである。が然し存在の可認識性が知られない場合でも存在は認識され得るのである。同様に又 (智性によつて) 認識された存在は真なるものであるが、存在を認識することによつて真なるものが認識されるのではない。

(註一) 一章参照。

(註二) “Anima est quodammodo omnia secundum sensum et intellectum” の句はトマス・アリストテレスの認識論について重要な意味を持つものであり、智性の優越性をこれに置く所謂トマスの智性主義を示すものである。

cf. P. Rousset, L'intellectualisme de S. Thomas. Paris. 1924.

尚この “quodammodo” に注意すべきである。“omnio” を許さんとする近代概念論的主観主義的認識とは充分に区別されねばならない。

(註三) 一章参照。

(註四) 事物に於ける真なるものと存在するものととの置換は実体的であるに反し(四章註四参照) 智性に於けるそれは作用とその結果との間に見られる如き関係としてのみ真なるものと存在するものと置換されるのである。―勿論之れは一章に見たる如く真理の(智性の定義) からして明らかな事である。

(註五) 本論第四章註五参照

#### 第四章 善は論理的に真なるものよりも先きなりや否や。<sup>(註一)</sup>

第四章に対しては次の如く進められる。

(一)、善なるものは論理的に真なるものに先行すると考えられる。と云うのは「物理学」<sup>(註二)</sup> 一から明らかのように、より普遍なものは論理的に先行するものであるから。ところで善なるものは真なるものよりも普遍的なものである。何となれば真なるものは善なるものの即ち、智性の一種であるから。それ故に善なるものは論理的に真なるものよりも先きである。

(二)、更に、善なるものは事物の裡に存在する。が真なるものは上述したる如く、智性の綜合したり分析したりすることの裡に存在する。<sup>(註三)</sup> ところで事物の裡に存在するものは智性の裡に存在するものよりも先きである。

それ故に善なるものは真なるものよりも論理的により先きである。

(三)、更に、「倫理学」四に明らかな如く、真理は徳の一種である。ところで徳は善なるものの下に含まれる。と云うのはアウグスティニスが「自由意志論」二に云う如く、「徳は精神の善なる性質である」から。それ故に善なるものは真なるものよりも先きである。

之れに対して次の如く云われて居る。より多くのものの裡に存在するものは論理的に先きである。ところで真なるものは善なるものが存在しない或るものの裡に存在する。例えば数学の裡にの如く。それ故に真なるものは善なるものよりも先きである。

之れらに対して答えて云うべきである。真なるものも善なるものもその基体(supposito)に關しては存在と置換されるけれども、(註四)論理的には異なるのである。それ故に真なるものは絶対的に云うならば、善なるものよりも優れて居るのである。この事は次の二つの事から明らかである。先づ第一に、真なるものは善なるものよりも先きなる存在とより密接に關係して居るが故にである。何となれば真なるものは存在自身に單的にそして直接的に關係するが、善なる概念は或る意味で存在が完全である限り、存在を導き出すからである。と云うのはかくの如くして善は意欲され得るのであるから。第二には、認識は本性的に意欲よりも先きであると云う事から明らかである。かくて真なるものは認識に關係し善なるものは意欲に關係するが故に、真なるものは論理的に善なるものよりも先きとならう。

それ故第一の反論に対して次の様に云われるべきである。意志と智性は相互に他を含む。

と云うのは智性は意志を認識し、意志は智性を知ることを意志するのであるから。かくて意志の対象に關係させられるものの中には、智性の対象に屬するものが包括させられるのである。その故に意欲され得るものの秩序に於いては善なるものは普遍的なものととして、真なるものは特殊なものととして意志に關係するのである。然し認識され得るものの秩序に於いてはこの逆である。それ故真なるものは善なるものの一種であると云う事から、善なるものは、意欲され得るものの秩序に於いてより先きなるものであると云う事は出て来るのであるが、單的に絶対に先きであると云うのではないのである。

第二の反論に対して次の如くに云うべきである。智性の裡により先きに入り込んで (cedit) 居る限り或るものは論理的により先きなのである。ところで智性は先づ第一に存在自身を知解し、次に自己が存在を認識することを知解するのである。<sup>(註五)</sup>そして第三に自らが存在在意欲すること把握するのである。それ故に第一に存在の概念が存在し、第二に真なるものの概念が、第三に、たとえ善は事物の裡にあるとしても、善の概念が存在するのである

第三の反論に対して次の様に云うべきである。真理と呼ばれる徳は一般的な真理ではなく、それに従つて人間が行為や言語の裡に実際に自己が存在する如く、自己を現わす或る真理なのである。ところで人間が自己の生活に於いて、この真理がすべての他の事物の裡に存在すると上述したる如くに神の智性によつて秩序づけられているものを満す限り、生命的真理はかゝる特殊な意味に於いて云われるのである。ところで正義の真理は、人間が法則の秩序に従つて他者への義務を果す限り、人間の裡に存在するのである。それ故にこの様な特殊的な真理への展開は存しないのである。

(註一) “secundum ratione” 理拠上或いは概念的にも訳されるが、今は「論理的」に云う言葉を用いた。

(註二) cf. Poster., cap 2.

(註三) 二章参照。

(註四) 原文には “cum etne” となつてゐる。然し存在は事物の裡に真なるとは異つた或物を意味している。(従つて真理と存在は置換されない) 真なる事物は存在するものであり存在するものは又智性の対象として真なるものであるからして置換されるのは真なるものと存在するものなのである。

それ故この命題は「真なるものはその基体<sup>(註一)</sup>に於いて—善にも妥当する—存在するものを置換される」となるであらう。

(註五) この第一のものがスコラで云う intellectus prima 第二のものを intellectus secunda aut reflexiva と云う。この区別はトマス認識論に於いては重要な意義を持ち、之れに続く一文は尚一層明確にトマス認識論の特性を示めしている。この intellectus prima は近代に於いて Brentano, Bolzano, Husserl. 等の志向性の概念のランチョウをなすものである。この intellectus prima の考えは近代に於いては忘れられ intellectus secunda のみ重要視するの弊に落ち入りこゝに觀念論の陥穴が開き又近代認識論の狭隘さが生ずるのである。尚本論第三章反論三参照。

## 第五章 神は真理であるや否や。

第五章に対しては次の如く進められる。

(一)、神は真理でないと考えられる。と云うのは真理は智性の綜合、分析の働きの裡に成立するものであるが、神に於いては綜合も分析も存在しないからである。それ故に神には真理は存在しない。<sup>(註二)</sup>

(二)、更に、アウグスティニスの著「真正宗教論」によれば、真理は「始源への似像」である。ところで神に於いては原理への似像は存在しない。それ故に真理は神の裡には存在しない。

(三)、更に、神に就いて云われるところのものは、あらゆる事物の第一原因に就いて云われる如くに云われるので



ある。かくて神の存在があらゆるものの存在の原因である様に、神の善はあらゆる善の原因である。それ故に神の裡に真理が存在するとするならば、あらゆる真なるものは神によつて存在する事にならう。ところで或るものが罪を犯すと云う事は真である。従つてこれは神によつて存在することにならう。これは虚偽であることは明らかである。

之れに対してヨハネ伝一四に於いて「我は道、我は真理、我は生命なり」と云われて居る。

之れらに対して答えて云うべきである。上述したる如く真理は、智性が存在するがまゝの事物を把握する限り智性の裡に存し、事物が智性に一致し得るものを持つて居る限り事物の裡に存在する。<sup>(註二)</sup>ところでこの事は神の裡に最も多く見出されるのである。と云うのはこの存在は自らの智性と一致するのみでなく自己自身を認識すること（即ち自分の智性の仿き）であるからである。自己自身を認識すると云う事はあらゆる他の存在や智性の基準<sup>へかり</sup>であり原因である。神は自らを認識することであり又その存在自身でもある。それ故に神の裡に真理が存在するばかりでなく神自身最高の真理であり第一真理であると結論される。

それ故第一の反論に対して云うべきである。神の智性に於いては、綜合も分析も存在しないが、神の單純なる認識の仿きによつてあらゆるものを判断し合成的なすべてのものを知るのである。かくて真理は神の智性の裡に存在する。

第二の反論に対して云うべきである。我々の智性の真なるものはその始源即ち智性がそこから認識を受けるとこ

ろの諸事物と一致させられる限り存在するのである。又事物の真理はその始源即ち神的智性と一致させられる限り存在するのである。<sup>(註三)</sup> 本来的に云うならば、恐らく始源を持つて居る神の子に真理が分有 (appropriatur) させられなければ、神の真理に就いてこの事は云われ得ないのである。然し我々が本質的な意味での神の真理に就いて云うならば、他のものによつて存在するのではないが故に父は自ら存在するのであると云う如く、肯定的なものが否定的なものに還元されるのでなければアウグスティヌスの云つた事は理解出来ないのである。同様に、神の真理は神の存在が自らの智性に不一致でない限り原理への似像であると云われ得るのである。

第三に対して次の如く云うべきである。非存在や欠除 (privatio) は自己自身の真理を持つて居ないがたと智性の知解によつてのみ真理を持つのである。ところで智性のすべての知解は神によつて存在するのである。それ故に、この人間が姦淫することは真であると云う命題の中に存するあらゆる真理はすべて神から出て来るのである。然しその故にこの人間は姦淫すると云う事は神から出て来ると論ぜられるならばそれは偶々起きたるごまかし (fallacia accidentis) である。

(註一) 二章参照。

(註二) 一章参照。

(註三) 存在論的真理がここに於いて示めされる。真理は事物と我々の智性との一致適合に於いて成立し又事物は神の智性との關係に於いて始めて真となるのである。我々の智性の真理は神の智性とこの如き關係のある事物との一致とに於いて始めて成立するのである。尚之れに就いての論究に就いては、

Wilpert; Wahrheitssicherung bei S. Thomas. Kap. I a 3. 及び

McCall, Raymond J; S. Thomas on Ontological Truth. (in the New Scholasticism XII).

## 第六章 それによつてすべてのものが真となる唯一の真理が存在するや否や。

第六章に対して次の様に進められる。

(一) それによつてすべてのものが真となる唯一の真理が存在すると考えられる。何となれば、アウグスティヌスの「三位一体論」十五によれば「神以外、如何なるものも人間精神より大なるものは存しない。ところで真理は人間の精神より大である。でなければ人間の精神は人間の真理に就いて判断するであろう。然かるに実際には真理に従つてすべてのものを判断するのであつて精神自らに従つてこれらを判断するのではない。それ故に神のみが真理でありそれ故に神以外の真理は存在しない。

(二) 更に、アンセルムスは其著「真理論」に於いて時間が時間的なものに関係する如く、真理は真なるものに關係すると云つて居る。ところですべての時間的なものに対しては唯一の時間が存在する。それ故にそれによつてすべてのものが真となる真理は唯一つ存在する。

之れに対して次の如く云われて居る。「讚美歌」一一に於いて「諸真理は人の子達によつて消え薄れたり (Dimin-tae)」と。

之れらに答えて云うべきである。それによつてすべてのものが真となる唯一の真理は、ある意味では存在するが又異つた意味では存在しない。この解明に対しては次の事を知るべきである。即ち或るものが多くのものに就いて一義

的に (univoce) 述べられる場合、その固有の本質に従つてその或るものはそれらの各々の裡に見出されるのである。丁度動物が動物なるすべての種の裡に見出される如く。ところで或るものが類比的に (analogice) 多くのものに就いて述べられる場合、そのものはその固有の本質に従つてそれらの一つの裡にのみ見出されるのである。そしてそれによつて他のものが証明されるのである。それ故に健康であると云う事が動物や尿や薬に就いて述べられるのである。が然しこれは動物の裡にのみ健康であると言ふ事が存在するからではなく薬が健康の原因である限り、動物の健康によつて薬が健康であると呼ばれるのである。そして又尿は健康を表わしたものである限り健康と呼ばれるのである。そしてたとえ健康が薬や尿の裡に存在しないとしても、この両者に於いて、それによつて一つは健康を作り一つは健康を表わすものが存在するのである。<sup>(註一)</sup>

ところで真理はそれが神の智性に關係づけられる限り、第一に智性の裡に、第二に事物の裡に存在すると我々は既に述べて来た。それ故に智性の裡に存在するものとしての真理に就いてそれ本来の性質に従つて云うならば、多数の真理が多数の被造的智性の裡に存在するのである。又同様に同一の智性に於いても知られたる事物の数に従つて数多くの真理が存在するのである。それ故に讚美歌一一の「諸真理は人の子によつて消え薄れたり」に就いてのアウグスティヌスの註釈は「一人の人間の顔から多くの似顔を鏡の中に反映する如く、神の唯一の真理から諸真理が反映する」と云つて居る。ところで若し我々が事物の裡に存在するところの真理に就いて語る場合、すべての事物は一つの第一の真理即ちすべてのものがそれ自身の存在性に従つて似せられたところの真理によつて真となるのである。かくて事物の本質或いは形相は多数であるけれども、それに従つてすべての事物が真となる神の智性の真理は唯一つなのである。<sup>(註二)</sup>

それ故に第一の反論に対して次の如く云うべきである。精神はある真理によつてあらゆる事物を判断するのではなく、鏡に於いての如く第一原理によつて精神に反映する限り、第一原理によつて判断するのである。それ故に第一原理は精神より大であると云う事になるのである。然し又我々の智性の裡に存在する被造的真理は絶対的にではないが、条件的に即ちこの真理が精神の完成である限り精神より大である。丁度智識が精神よりも大であると云い得る如くに。然しながら如何なる存在物も神以外は理性的精神よりも大なるものは存在しないと云う事は真である。

第二の反論に対して云うべきである。アンセルムスの議論は、神の智性との関係によつて真であると云われる限り真理である。

(註一) ここにトマスの類似概念の明確なる例証を見る。 *univoc* と *analogice* の考え方はトマス存在論の構成にとつて重要な位地を占める。「存在」「一者」「普遍」「真」「善」等はすべてかかる *analogice* なものとしてトマスによつて考えられている。尚すぐ後句アウグスティヌスの「讚美歌」一一に就いての鏡の例による註訳参照。

(註二) 之の類比によつて真理と諸真理(被造的)との関係対立を矛盾なく説明する。

## 第七章 被造的真理は永遠なりや否や。

第七章に対しては次の如くに進められる。

(一)、被造的真理は永遠であると考えられる。と云うのはアウグスティヌスは「自由意志論」二に「如何なるものも円の本性より以上に又二たす三は五であると云う以上に永遠なるものはない」と云つて居る。ところでかかる真理は被造の真理である。それ故に被造的真理は永遠である。

(二)、更に、常に存在するあらゆるものは永遠である。ところで普遍的なものは常にそしてあらゆる場合に存するものである。それ故これは永遠である。それ故最も普遍的なものである真なるものも又永遠である。

(三)、更に、現在に於いて真なるものは常に真で在りつづけるものであつた。ところで現在形の命題の真理が被造的真理である如く、未来形の命題の真理も又被造的真理である。それ故何らかの被造的真理は永遠である。

(四)、更に、始源も終局もないものは永遠である。ところで言表的真理 (*Veritas enuntiabilem*) には始めも終りもない。何となれば真理が以前には存しなかつたが故に或る始源を真理が持つて居つたとするならば、真理は存しなかつたと云うことが真となり、そしてそれは何らかの他の真理の概念によつて真となつたのである。かくて真理は真なるものが存在し始める以前に存在して居つたのである。同様に真理が終りを持つていると主張されるならば、真理は存在しないと云う事が真となるだろうから、真理は存在する事を止めた後に又存在する事になる。それ故に真理は永遠である。

之れに対して云われて居る。上述したる如く、神のみが永遠である。<sup>(註二)</sup>

之れらに対して答えて云うべきである。言表的真理は智性の真理に外ならない。何となれば、云表し得ると云う事は智性や言葉の裡に (*in voce*) あるからである。ところで言表が智性の裡に存する場合、これは必然的な真理を持つのであるが、然し言葉の裡に存する場合、言表が真であると云われるのはそれが或る種の智性の真理を意味する限りに於いてであつて、言表を主体と考へてその裡に或る真理が存すると云うことのためではないのである。恰も尿が

その尿自身の裡にある健康によつてではなく、その尿が示す動物の健康によつて、健康であると云われるが如きである。之れと全く同様な意味で智性の真理によつて事物は真であると呼ばれると云う事は上に述べられた。<sup>(註二)</sup>

それ故若し如何なる智性も永遠でないとすると如何なる真理も永遠でないと云う事になるであらう。ところで神の智性のみ永遠であるが故に、この智性に於いてのみ真理は永遠性を持つのである。然しこの事から、既に明らかにしたる如く神の智性は神自身であるからして、神以外の他のものが永遠であると云う事は出て来ないのである。<sup>(註三)</sup>

かくて第一の反論に対して次の如く云うべきである。円の本性や、二足す三は五と云うことは神の精神の裡に於いてのみ永遠性を持つのである。

第二の反論に対して云うべきである。あらゆる時、あらゆる場処に存するものは二様に考えられる。その一つは、自己の裡にあらゆる時とあらゆる空間にむかつて拡張してゆく力を持つているが故に。恰かもあらゆる時間空間にも存在すると云う事が神に属するが如く。―他の一つは自己の裡にそれによつて何らかの空間と時間に対して決定されるものを持つていないが故に。恰かも第一原料が一つであると云われるが如く。之れは勿論あらゆる形相の区別を排除することによつてであつて、人間が形相の単一性によつて一つであると云うのと同様の意味で一つの形相を持つているというためではない。かゝる仕方では普遍的なものが「今」、「此処」から独立している限りあらゆる普遍的なものはあらゆる時間あらゆる空間に存在すると云われるのである。然しこの事から、永遠なるものが存するならば、智性の裡に於ける場合を除いて、普遍なるものは永遠であると云う事は出て来ないのである。

第三の反論に対して次の如く云うべきである。現に存在するところのものはそれが実際に存在する以前にはその未

来（あるべきもの）であつた。と云うのはその未来はその原因の裡に存して居るが故にである。それ故この原因が變更されれば生じて来るべきものはその未来とはならないであらう。ところで第一原因のみは永遠である。それ故現に存在するものは、その生成すべき存在がその種的原因の裡に存しなければ、常に存在するであらうと云う事は真とはならないのである。ところで神はかゝる原因である。

第四の反論に対して次の如く云うべきである。我々の智性は永遠でないから我々によつて造られる言表的真理も又永遠ではなく或る時を持つて始まる。ところでかゝる真理が存在する以前にこの様な真理が―その裡にのみ真理が永遠である神の智性による場合は別として、―存在すると云うことは真ではなく、寧ろかゝる真理がその場合にはまだ存在しなかつたと云うことがここでは真である。そしてこの事は我々の智性の裡に今存するようになつた真理によつてのみ真となるのであつて事物の側にもとあつた何らかの真理によつてそうなるのではない。何となれば、これは非存在に関するものであり、非存在はそれ自身は真理であるに足りるものをもつて居らずたゞ非存在を理解する我々の智性の側からのみかゝるものを持つものであるからである。それ故我々が真理自身の非存在を真理自身の存在に先行するものとして理解する限り真理は存在しなかつたのだと云う事が真なのである。

（註一） 第十論題三章参照。

S. Theologica I<sup>a</sup>. 1<sup>a</sup>. q. 3. Eternitas dei.

（註二） 本論題一章参照。

（註三） 本論題五章参照。



## 第八章 真理は不変なるや否や<sup>(註一)</sup>

第八章に対して次の如くに進められる。

(一)、真理は不変なるものと考えられる。と云うのはアウグスティヌスは「自由意志論」二や「真正宗教論」に於いて「真理は精神とは同じものではない。さなければ精神の如くに可変なものとなるから」と云つて居るから。

(二)、更に、あらゆる変化の後に残るところのものは不変なものである。恰も第一質料があらゆる生成や破壊の後にも存続するが故に与えられないもの (*ingentia*) であり滅亡しないものであるが如く。ところで真理はあらゆる変化の後にも存続するものである。と云うのはあらゆる変化の後にも事物が存在するとか或いは存在しないと云う事は真であるから。それ故に真理は不変なものである。

(三)、更に、若し言表的真理が変化させられるとするならば、事物の変化に応じて、この真理は最も変化させられるのである。然し真理はこの様には変化させられない。何とならば、アンセルムスによれば「真理とは事物が神の智性に於いてその事物に属しているところのものを満す限りでの、或る正当性なのである」から。

ところで「ソクラテスは坐る」と云う命題は「ソクラテスが坐つて居る」と云う事を表示するものとして神の精神から受けとるのである。又彼が坐つて居ない場合さえも同じ事を表示するのである。それ故に命題的真理は如何なる意味に於いても不変である。

(四)、更に、同一の原因の存在するところには同一の結果が生ずる。ところで同一の事物は三つの命題的真理、即ち「ソクラテスは坐つて居る」、「坐るだろう」、「坐つた」と云う命題の原因である。それ故にこれらの(三つ)の真理は同じものである。ところでこの中の何れかの一つ又はどれかが真なる命題でなければならぬ。それ故にこれら

命題の真理は不変となり又同じ理由によつて他のすべての命題の真理も不変となるのである。

之れに対して次の如く云われて居る。讃美歌一一に「真理は人の子によつて消え薄れたり」と。

之れらに対して答えて云うべきである。上述したる如く、<sup>(註二)</sup>真理は本来的に云つて智性の裡にのみ存在するのであるが事物は或る智性の裡に存在する真理によつて真と云われるのである。それ故に真理の可変性は智性に関して考察されるべきである。即ち智性によつて認識されたる事物との一致を持つものの裡に成立する真理に就いて考察されねばならない。

ところでかかる一致は二様に变化させられ得るのである。恰かも二つのものの中の何れか一方の変化によつてすべての他の似像が变化させられる如くに。従つてその一つはそれ自身何ら变化しない事物に何らかの他の異なつた意見が生ずると云う事によつて智性の側から、そして又第二には事物が変えられるとしても意見は変らないと云う事から、真理は変えられるのである。その何れの場合に於いても真なるものから虚偽なるものへ變つてゆくのである。それ故にその中に何らの意見の変更もなし得ず、如何なる事物も逃し得ない認識を持つて居る或る智性が存在するならば、このものの裡にこそ真理は存在するのである。ところでかゝるものこそ上述したるところから明らかなの如く神の智性である。<sup>(註三)</sup>

それ故に神の智性の真理は不変なるものである。ところで我々の智性の真理は可變的なものであるが然しこれは智性自身がこの変化の主体であるからではなくして、我々の智性が真理から虚偽に変えられる限りに於いて可變的なもの

のなのである。この様にして形相は可變的と云われ得るのである。ところで神の智性の真理はそれに従つて自然物が真であると云われるものであり、これは全く不変なものである。

それ故に第一の反論に対して云うべきである。アウグスティヌスは神の真理に就いて云つたのであると。

第二の反論に対して云うべきである。真なるものと存在とは置換され得るものである。<sup>(註四)</sup>それ故に存在は必然的にではなく、「物理学」一に於いて云われた如く、この存在<sup>あ</sup>の存在が生成されたり破壊されたりする限り、たゞ偶性的にのみ生成されたり破壊されたりするのである。この様に真理も如何なる真理も不変に存続しなかつたがためにではなく、以前に存在した個別的な真理が存続しなかつたがために変化させられるのである。

第三の反論に対して答えて云うべきである。それに就いて神の智性によつて秩序づけられた或るものを満す限り事物は真理を持つと云われるのである。又それと同様に命題も真理を持つては居るが、この命題が智性の真理を表わす限りこれは特殊な意味で真理を持つと云われるのである。即ち智性と事物との一致の裡に成立するところの真理を持つと云われるのである。

これが掩われて居るとき、意見の真理は変えられ従つて又命題の真理も変えられるのである。それ故「ソクラテスは坐る」と云う命題は彼が坐つて居り、そして表現が表示するもの (significativa) である場合、事物の真理も又表示の真理も (Veritas significationis) それが真なる意見を表わしている限り共に真である。ソクラテスが立つときは、最初の真理は存続するが、第二の真理は変えられるのである。<sup>(註五)</sup>

第四の反論に対して次の如く云うべきである。「ソクラテスは坐る」の命題の真理の原因であるこの彼の「着坐」は、

ソクラテスが坐るときと坐つた前後とは同じ状態ではない。それ故、そこから結果した真理は異つた意味を持つて居る。それぞれ現在の、過去の、未来の命題によつて表わされるのである。それ故三つの命題の一つが真であると雖も同一の真理が不変に存続すると云う事は帰結しないのである。

(註一) 不変性は神の本質的な特性を表わすものとしてアウグスティヌスの神概念に於いて特に重要な役割を演じている。彼にとつては神的なもののみが不変であり真理は不変であるからして又この真理は神的なものとして考えられている。ここにトマスのアウグスティヌスの考え方を明確に眺みとる事が出来る。

(註二) 一章参照。

(註三) *S. Theologica 1<sup>a</sup>. 1<sup>a</sup>. a 14. et 15. De scientia dei, De ideis.* 参照

(註四) 四章註四参照。

(註五) 第一の真理とはここでは事物の真理を指し第二の真理とは表示の真理を指す。あらゆる命題は二つの関係即ち事物と智性の関係を持つて居る。一つは事物の真理であり他は智性の真理であり表示の真理である。一般に命題は記述されたもの、表示されたものとして事物に関係し又一つの言語(表現)を以つて智性の把握したるものを表明する。スコラでは之れを一般的命題として次の様に云う。

“*Verba sunt significativa rerum, significativa conceptuum.*”

或る意味では第一の機能と第二の機能とは全く無関係なものである。何故ならば「ソクラテスは坐る」と云う命題を人が考えようと考えまいと金は金である如くに、常に坐つて居るソクラテスを意味して居りそれ故にこの命題の真理は事物が変化しても尚揚棄されないものである。然しながら事態が変化する場合事物とこの命題を考える智性との関係に一つの変化が生ずるのである。従つて命題の事物の真理は存続するが把握の真理は—命題はこの把握を表示したもの—は揚棄されるからである。

## 虚偽に就いて（第十七論題）

次ぎに虚偽に就いて考察される。これに就いては次の四点が探究される。

- (一)、虚偽は事物の裡に存在するや否や。
- (二)、虚偽は感覚の裡に存在するや否や。
- (三)、虚偽は智性の裡に存在するや否や。
- (四)、真偽の対立に就いて。

## 第一章 虚偽は事物の裡に存在するや否や。

第一章に対しては次の如く進められる。

(一)、虚偽は事物の裡に存在しないと考えられる。と云うのは、アウグスティニスは「独白録」二に「若し真なるものが存在するものであるならば、たとえ之れに反対する者があるとしても、虚偽は何ら存在しないと結論されるであらう」と云っているから。

(二)、更に、虚偽なるものは欺むくこと<sup>(註二)</sup>から出て来る。ところで事物は欺かない。何となればアウグスティニス「真正宗教論」に云つて居る如く、事物は自己の形相以外の如何なるものをも明示しないからである。それ故に虚偽なるものは事物の裡には見出されない。

(三)、更に事物が神の智性を模して居る限り、上述したる如く<sup>(註二)</sup>真なるものは神の智性との関連によつて事物の裡に存在すると云われるのである。ところであらゆる事物はそれが存在する限り、神に似せられているのである。それ故

にあらゆる事物は何らの虚偽の余地なく真である。かくて又如何なる事物も虚偽ではない。

之れに対してアウグスティニスは「真正宗教論」に「すべての肉体は真なる肉体ではあるが、それは偽わりの統一である」と云つて居る。と云うのは、これは統一を模しはするが真の統一ではないからである。すべての事物は神の統一を模しはするが尚それには至らないのである。それ故すべての事物の裡には虚偽は存在する。

之れらに対して答えて云うべきである。真なるものと虚偽なるものは対立しているが故に、――勿論この対立は同一のものに関して存在するのであるが――我々が第一義的に真理を見出すところに虚偽を探し求めねばならない。

即ち智性の裡に。

ところで事物の裡には智性との関連によるの以外は真理も虚偽も存在しないのである。そしてすべてのものはそれに必然的に属するところのものによつて端的に名付けられ、又それに偶性的に属するものによつてはたゞ条件的に名付けられるのである。それ故に、事物は事物が依存し又必然的に関係せられるところの智性によつて端的に虚偽と名付けられ得るのであり、又それに偶性的に依存するところの智性との関係に於いては条件的にのみ虚偽と云われ得るのである。

ところで自然物は人工物が人間に依存する如く神の智性に依存するものである。かくて人工物は製作者の形相に達しない限り必然的にそしてそれを自らに於いて虚偽と云われるのである。それ故に製作者はその作品が彼の技術の本来の仿きに達していないならば、虚偽の仕事となすと云われるのである。

かくて神によつて創造された事物に於いては、神の智性との關係によつては虚偽は見出し得ないのである。何となれば、事物の裡に起るすべてのものは神の智性との關係によつて生ずることであるから。意志の働きには神によつて秩序づけられたものから自らを取去ろうとする能力が存するからしてたゞ意志の働きに於いてのみ虚偽は生じ得るのである。この裡にのみ罪の悪が存在するのである。この様な意味で讚美歌四の言葉「何故汝は空虚を愛し何故に虚言を探し求むるや」に従つて、罪自身は悪であり虚言であると聖書の裡に云われて居るのである。又有徳の行為は神の智性の秩序に従つて居る限り生命の真理と呼ばれるのである。かくてヨハネ傳三に於いて「真理を行ふもの汝は光に至る」と云われるのである。

ところで我々の智性との関連に於いては、この智性と偶性的に関連させられる自然物は絶対的にではなく条件的に虚偽と呼ばれ得るのである。これは二様に云われ得る。その一つは、表示された事物の概念によつてである。

そして虚偽なる論述や思想によつて表示され又表現されたものは虚偽と呼ばれるのである。かゝる点からして如何なる事物もその裡に存在して居ないものに関して虚偽であると云われ得るのである。アリストテレスが「形而上学」五に於いて、直径はあやまつて計量され得るものであると我々が云う時の如く。そして又アウグスティヌスが「独白録」二に「眞の悲劇役者は偽のヘクトールである」と云うのも同様である。それ故又これと反対に如何なるものもそれに属して居るものに関しては眞であると云われるのである。今一つは、原因の仕方によつて虚偽と云われるのである。それ故に本性的に虚偽なる意見を生ずる事物は虚偽であると云われるのである。ところで我々に於いては外的な現象によつて事物を判断するのが本性であるが故に——と云うのは我々の認識は感覚（これは一義的に外的な事象を取扱う）にその起源を有して居るから——外的な事象の裡に事物自身と異つた相似を持つて居るものは、当の事物に関しては虚

偽であると云われるのである。胆汁は偽の蜂蜜であり、錫は偽の金なのである。この様な意味でアウグスティニスは「独白録」二に「真実らしく我々の知解に現われる事物を虚偽なるものと我々は云う」と云つて居るのである。又アリストテレスは「形而上学」五に、「その様には存在しないか或いは存在しないところのものを如何にも尤もらしく現象せしめる性格のものはすべて虚偽と云われる」と云つて居る。この様な仕方では虚偽なる意見や言表も愛する限り人間は虚偽であると云われるのであつて、人間が虚偽を捏造する事が出来ると云うことからはないのである。何とならば、若しこれが出来るならば「形而上学」五に云われて居る如く、多数の智者や学者は偽と云われるであらうか。(註四)

それ故第一の反論に対して次の如く云うべきである。智性と関係させられる事物は、存在するものに関しては真と云われ存在しないものに関しては虚偽と云われるのである。それ故「独白録」二に云う如く「真なる悲劇役者は偽のヘクトール」なのである。かくて存在するものの裡には或る非存在が見出されるが如く、存在するものの裡には虚偽のある理拠が見出されるのである。

第二の反論に対して云うべきである。事物は本性的には欺かないのであるが、偶性的に欺くのである。と云うのは事物は実際に存在しないものの似像を生ずることによつて虚偽の機因を与えるからである。

第三の反論に対して云うべきである。神の智性との関係に於いては事物は虚偽とは云われない。この場合、事物は絶対的に虚偽とならう。が我々の智性との関係に於いては事物は虚偽と云われ、その場合は条件的に虚偽となるのである。



反論に於いて述べられた第四のものに対しては次の如く云うべきである。偽われる似像や表象は虚偽の理拠を導入しない。これらが虚偽の意見の機因を現わさない限りは。それ故、似像の存在するところすべて虚偽があると云われない。本性的に虚<sup>にや</sup>の意見を作る似像の存在するところにはすべての場合ではないが一般的に虚偽と云われるのである。

(註一) falsum は fallere からは元来出て来ないのであるが然し我々はすべての虚偽の裡には何らかの欺瞞が、それが智性の側からであろうと事物の側からであろうと、先在すると考えるならば一応この事は理解されると思う。

(註二) 十六論題一章参照。

(註三) 理拠と訳し此処では根拠の意味に考えた方がよい。

(註四) 神の智性との關係に於ける虚偽は絶対的な意味で虚偽となりそれは存在物の否認を意味する。人間の智性との關係に於ける虚偽は二様に考えられる。即ち表示されたものと又その様に表現する当の原因物から然かも偶性的に生ずるのである。存在するものの虚偽は絶対的に存在せず存在する限りは真なるものと考え虚偽の生ずる機因を人間の「意志」に於いている。

## 第二章 虚偽は感覺の裡に存在するや否や。

第二章に対して次の如くに進められる。

(一)、虚偽は感覺の裡に存しないと考えられる。と云うのはアウグスティヌスは「真正宗教論」に「あらゆる身体的感覺が觸発されるが如くに伝えるならば、感覺から我々がこれ以上要求する何物も知らない」と云つて居る。それ故に感覺によつては我々は欺かれない。それ故に虚偽は感覺の裡には存在しない。

(二)、更に、アリストテレスは「形而上学」四に「虚偽は感覺に固有なものではなく、構想力 (phantasia) に固有なものである。」と云つて居る。

(三)、更に、非合成的なものの裡には、真も虚偽も存しないが、合成的なものにのみ存在する。ところで綜合する

ことや分析することは感覚には属しない。それ故に感覚の裡には虚偽は存しない。

之れに対して次の如く云われて居る。即ちアウグスティヌスは「独白録」二に「すべての感覚に在る欺むく似像によつて、我々が欺かれることは明らかである」と云つて居る。

之れらに答えて云うべきである。虚偽は感覚の裡に求められるものではない。真理がその裡に求められるのは勿論であるが。ところで真理は感覚が知る様な方法では感覚の裡には存在しないのである。然し上述したる如く、<sup>(註一)</sup> 感覚的事物に就いて感覚が真の知解を持つ限り感覚の裡に真理は存するのである。これは事物を在るがまゝに知覚する感覚によつて起るのである。それ故に事物を実際にあるがまゝのものと異つて理解し判断することによつて感覚の裡に虚偽が存在すると云う事が起るのである。ところで事物の似像が感覚に存する限り事物は認識に関係するのである。さて或る事物の似像は感覚の裡に三つの仕方で存在する。第一の仕方は一義的にそして必然的な仕方である。恰かも視覚の裡に色の似像が存し、又其の他の固有の感覚的対象の似像が存するが如く、第二は一義的ではないが必然的な仕方である。恰かも視覚の裡に形とか大きさとか又その他の共通感覚的対象の似像が存するが如く。第三に一義的でもないが必然的な仕方である。恰かも人間としてではなく偶々色のついた対象が人間であると云うことが起る限り、人間の似像が視覚の裡に存するが如く。<sup>(註二)</sup>

それ故に固有の感覚的対象に関しては、感覚は虚偽の認識を偶性的に又まれにでなければ持たないのである。そしてこれは器官の不調から感覚的形相をうまく受けとれないと云う事によるのである。恰かも或る受動的な主体がその

器官の不備からして能動者の印象をあやまつて受けとるが如きである。それ故病人のわるい舌の故に甘いものが酸ばいものと考えられるのである。ところで實際、感覚の共通対象や偶性的対象に就いては正しい状態の感覚の裡にも同様あやまれる判断が存し得る。と云うのは感覚が直接的にではなく偶性的に、或いは他の異つた対象に關係させられるその結果としてこれらの対象に關係させられるからである。

それ故に第一の反論に対して云うべきである。即ち感覚が觸発されることはそれ自身感覺することである。それ故に感覚が觸発される如くに伝達する事からして、我々が何か感覺して居ると判断する判断の裡には欺かれないと云う事が出て来るのである。然し感覚が時として在るがまゝと異なつて觸発されると云う事からして、時として感覚は在ると異つた事物を我々に伝達すると云うことも出て来るのである。それ故事物に關して我々は感覺によつて欺かれるが感覺することそれ自身に關しては欺かれないのである。(註三)

第二の反論に対して云うべきである。虚偽は感覚の裡に固有なものではないと云われるのである。と云うのは感覚の固有の対象に就いては欺かれないからである。それ故に異なつた意味でより平易に次の如く云われる。即ち固有感覺の対象に就いての感覚には虚偽はあり得ないと。ところで虚偽は構像力には附着する。何となればこれは存在しない事物の似像さえも表現するからである。それ故或る者が事物の似像を恰かも事物自身の如くに受けとるならば、かかる知解から虚偽は出て来るのである。それ故にアリストテレスは「形而上学」五に「影や絵やその似像を持つて居る事物が實際に存在しない限り虚偽と云われる」と云つて居る。

第三に対して云うべきである。この論は、虚偽は真偽を認識するものの裡に存する如くには感覺の裡には存在しな

いことを証明するのである。

(註一) 十六論題二章参照。

(註二) トマスは感覚の対象を、その感覚との関係の度合を考慮して、三段階に分ける。

即ち *propria sensibilia—primo et per se*

*sensibilia communis—non primo et per se*

*sensibilia per accidens—non primo et non per se*

そして虚偽の入り込んで来る度合を以下の章句で示している。

(註三) 感覚の判断に虚偽をみとめるもその感覚作用、それ自身 (*circa ipsum sentire*) に虚偽も真も存在しない。

### 第三章 虚偽は智性の裡に存在するや否や。

第三章に対しては次の如くに進められる。

(一)、虚偽は智性の裡に存在しないと考えられる。と云うのはアウグスティニスは「討論集」八三に「欺かれるすべての者はその中に彼が欺かれて居る事を理解しない」と云つて居る。ところで虚偽は我々が欺かれる限り何らかの認識の裡に存在すると云われる。それ故に智性の裡には虚偽は存在しない。

(二)、更に、アリストテレスは「靈魂論」三に於いて「智性は常に正しい」と云つて居る。それ故智性の裡には何ら虚偽は存在しない。

之れに対して「靈魂論」三に次の様に云われる。

即ち「認識されるものの綜合(構成)のあるところには真偽は存する」と。ところで認識されたものの構成は智性

の裡に存する。それ故、真偽は智性の裡に存在する。

之れに対して答えて云うべきである。事物はそれ固有の形相によつて存在を持つ如く、認識能力は認識された事物の固有の似像によつて認識を有するのである。それ故自然物は自らの形相によつて自らに適合する存在を欠くことはないが、ある偶性的な、或いは結果として起つて来るところのものを欠くことはあり得るのである。恰かも人間が二つの足を持つ事を失う事があつても人間である事を失うことが出来ないが如く。認識に於いても又認識能力はその似像によつて認識が形成される事物に関しては誤らないである。ところで事物自身によつて偶性的なもの或いはその形相に結果として起るところのもの（諸性質）に関しては誤り得るのである。かくて次の事が云われる。即ち視覚はその固有の感覺的対象に関しては欺かれないがそれから結果するところの共通の感覺的対象に関しては、又偶性的な感覺に関しては欺かれるのである。

ところで感覺が直接的にその固有の感覺的対象の似像によつて表象されるが如くに、智性は直接的に事物の本質の似像によつて形成される。其れ故感覺が固有の感覺的対象に関しては欺かれないが如くに、事物の本質に関しては智性は欺かれないのである。ところで智性の綜合や分析の場合には、智性はその本質を理解する事物に、その事物に帰せられない或るものを附加し或いはそれと矛盾させられるものを附加することによつて欺かれ得るのである。何となれば智性はかゝる事物の判断の際には、感覺が共通感覺的対象或いは偶性的感覺的対象に就いての判断に關係すると同様の状態にあるからである。然しながら既に真理に就いて注意したる如く、（註一）次の様な差異がある。智性の認識が虚偽であると云う事からばかりでなく、かゝる虚偽なる認識をも知っているが故に——智性が真理を知っているが如く——

智性の裡に虚偽が存し得ると云う差異である。ところで上述したる如く感覚の裡には虚偽は知られたものとしては存在しないのである。

さて智性の虚偽は必然的に智性の構成に關してのみ存するが故に、虚偽は智性の構成が加えられる限り、それによつて本質を知るところの智性の働きに偶性的に生じ得るのである。この事は二様に起り得る。その一つは智性があるものの定義を他のものに附加することによつて。恰かも円の定義が人間に附加されるが如くに。それ故或るものの定義は他のものに就いては虚偽である。今一つは同時に結合し得ない部分の定義を構成することによつて。と云うのは、この様な場合定義は或る事物に關して虚偽であるばかりでなくそれ自身虚偽となるからである。「四足の理性的動物」の如き定義が作られたとすればこの様なものである。何となれば或る理性的動物は四足であると云うこの結合を構成することはそれ自身既に虚偽であるからして、かゝる定義をなすことは虚偽である。この故に單純本質を認識する場合智性は誤り得ない。その場合智性は真であるか又は智性は何物をも全く認識しないかの何れかである。

それ故第一の反論に対して云うべきである。事物の本質は智性の固有の対象であるが故に、証明（本論）で行つた如く、——こゝでは何らの虚偽も存在しなかつた——我々が対象を本質に還元しそしてそれに就いて判断したる時は我々は或る物を本性的に知解すると云われたのである。かゝる意味でアウグスティヌスの言葉「欺かれるすべての者はその裡に欺かれている事を知解しない」を理解せねばならない。智性の如何なる働きによつても人は欺かれまいと云う意味に考へてはならない。

第二の反論に対して云うべきである。智性は本質に關して欺かれまいと同じ理由によつて第一原理に就いて欺かれ

ないが故に、第一原理に関しては常に正しいのである。何となれば自明的な原理は述語が主語の定義の裡に含まれて居る事からして、言葉が知られるや否や知解される如きものであるからである。

(註一) 二章参照。

#### 第四章 真なるものと虚偽なるものは矛盾するや否や<sup>(註二)</sup>。

第四章に対しては次の様に進められる。

(一)、真なるものは虚偽なるものと矛盾しないと考えられる。と云うのは、存在が非存在に対立させられる如くに真なるものと虚偽なるものは対立させられるからである。何故ならば真なるものは存在するものであるから。

ところで存在するものに非存在は矛盾として対立させられないのである。それ故真なるものと虚偽なるものは矛盾しはしないのである。

(二)、更に、相矛盾しているものの一つは他のものの裡には存在しない。ところで虚偽なるものは真なるものの裡に存在する。と云うのはアウグスティニスが「独白録」二に云う如く「非劇役者が真の非劇役者でないとするならば、彼は真のヘクトールでないことになろう」から。それ故に真なるものと虚偽なるものは矛盾しないのである。

(三)、更に、神の裡に於いては何らの矛盾も存しないのである。と云うのは、アウグスティニス「神国論」二二に云う如く神の実体に於いては何等の矛盾も存しないからである。ところで虚偽は神に対立させられる。何となれば、聖書の中で偶像は虚偽と呼ばれて居るが故に、「即ち「エレサレム」篇八に於いて、「彼等は虚言を把える」と云つているが「これこそ偶像である」と註釈書は云つてゐるから。―それ故に真なるものは虚偽なるものとは矛盾しないの

である。

之れらに対して、アリストテレスはペリヘメネイアスに於いて、虚偽なる意見は真なる意見と矛盾すると云つてゐる。

之れに対して答えて云うべきである。真なるものと偽なるものは矛盾として対立させられるのであつて、或者が云つた如くに肯定や否定としてではないのである。この事を明確にするために否定は如何なるものも措定せず又如何なる主体をもそれ自らに対して限定しないと云う事を知るべきである。それ故に例えば見えないもの (*non-videns*) とか坐つていないもの (*non-sedens*) と云う如くに非存在に就いても存在についての様に云われるのである。

ところで欠如は何物をも措定はしないが、主体を限定するのである。と云うのは「形而上学」四に云われている如く、欠如は主体の裡の否定であるから。盲目と云うのは見ると云う事がその本性であるものに就いてのみ云われるが故である。ところで矛盾は或るものを措定すると共にその主体を限定する。何となれば黒いと云うのは色の一種類であるから。さて虚偽は或るものを措定する。と云うのは「形而上学」四にアリストテレスが云う如く、存在しないものが存在すると云われたり考えられたり、或いは実際に存在するものが存在しないと云われたり考えられたりする限り、虚偽であるからである。と云うのは真なるものが事物の十全なる知解を含むが如く、虚偽なるものは事物の十全ならざる知解を含むが故にである。

それ故に、真なるものと虚偽なるものは矛盾するのである。



第一の反論に答えて云うべきである。事物の理に存在するものは事物の真理であり、知解されたものとして在るものは智性に於ける真理である。そしてこの（後者）の中に真理は第一義的に存するのである。それ故虚偽なるものは知解されたものとして存在しないものである。<sup>(註二)</sup>ところで存在を知解することと非存在を知解することは矛盾を含むのである。と云うのはアリストテレスが、ペリヘネイアス二に於いて証明している如く、「善なるものは善なるものである」と云う命題に矛盾するものは「善なるものは善なるものでない」と云う事であるからである。<sup>(註三)</sup>

第二の反論に対して云うべきである。虚偽なるものは之れに矛盾する真なるものに基けられない。——恰かも悪がそれに対立する善に基けられないが如く。——が然しその固有の主体であるものの裡に基けられるのである。この事は真なるものと善なるものは共通であり存在と置換させられ得るが故にその何れの場合にも起るのである。それ故すべての欠如が存在である主体の裡に基けられるが如く、すべての悪はある善の裡に基けられるのである。そして又虚偽はある真理に基けられるのである。

第三の反論に対して云うべきである。諸矛盾や欠如による対立は本来同一の事物に関して起るのである。それ故神自身に於いて考えるならば善の理拠に関して真の理拠に関しても矛盾する何物もそこには存在しないのである。と云うのは神の智性に於いては何らの虚偽も存し得ないからである。然し神に就いての我々の知解に於いては神は矛盾を持つのである。何となれば神に関する虚偽なる意見は真なる意見に矛盾するからである。それ故偶像に就いての虚偽なる意見が神の統一性に関する真なる意見に矛盾させられる限り、偶像は神の真理に対立させられるところの虚言と呼ばれるのである。

(註一) スコラに於いては一般に対象を次の四つに種別している。即ち矛盾的、相関的、反対的と従反対的との四つに。存在と非

存在は矛盾の対象でありこの対立は最も厳しいものである。之れに反し反対の対立はその相互の極に或る程度の距離を持つてゐる。従つて白と黒との間の対立は白と非白の対立よりも距りが大きいと考えられる。反対の対立は少くともその両極の間に類概念を持ち、一つのものから他への漸次的な移行が許されている。即ち白から黒への。

然しながら存在から非存在へは何らかゝる移行は存しない。事物は其処に存在するか存在しないかの何れかである。

(註二) 真理は本来的に智性の裡に存するからして虚偽も又必然的に智性の裡に存しなければならない。(十七論題、一章答弁参照) にせの金に就いて語る事は、金の如くに見えるメダルを真の金に見做す智性の把握に於いてのみ意味を持つのであり、事物自身は常に「あるところのもの」である。従つてこの虚偽なるものは存在しないものであると云う命題に「智性が実際に考えていない」と云う事を附加して理解すべきであらう。

(註三) 本註一参照。

(註四) 十六論題四章註四、参照

尚この虚偽論に就いては、McCall: St. Thomas' doctrine regarding Error. (in The New Scholasticism. Vol. 7).

あ と が き

真理及び虚偽に就いての問題は偶々トマスの展開せんとする神学論に挿入されたものであつてその解明の意図と方法は神学的見地よりするよりむしろ本来的な意味で存在論的見地よりなされたものと考えられる。と云うのは本来認識と云うものは「真なるもの」、「虚偽なるもの」を一義的にその対象とし、又トマスに於いてはこの認識は「存在するもの」とこれを把握せんとする智性、何らかの精神存在とのある一致適合(adaequatio)と考えられるからである。然しながら我々がこの真偽論を章を追つて見てゆくとき、我々がこゝにそれ以上のものゝむしろこゝにこそ彼の意図と骨頂とが存するが如きものが含まれている事を知るのである。彼はその各論題の前半に於いて真偽に就いての適切な概念規定と明確なる哲学的解明を試み事物の真理(Veritas rei aut in re)と智性の真理(Veritas intellectus)の分別を各々の真理定義に就いてなし、こゝに存在論的真理と我々の判断的真理の區別を明らかにして居る。が然し我々が神の真理、創造的真理、又それに対立する虚偽に就いて論ずる十六論題四章—八章に至る時、これらの論議は單なる存在論的哲学的見地を超えてトマスの思想の神髄とその極点とをそこに我々をして窺わしめるのである。

トマス自身第一章に於いて見る如く、イザークに由因するところの真理の定義即ち、

“Veritas est adaequatio rei et intellectus”を採用している。この定義は勿論トマスにとつては二様の意義を持ち、一つは智性の論理的真理(Veritas intellectus)に關して、他の一つは所謂存在論的真理即ち事物の真理(Veritas rei)に關して妥当することから彼は章を追つてこの adaequatio を規定するものとしての智性と事物の両者を考究してゆくのである。この“Veritas rei”と“Veritas intellectus”との區別は主として第一章に於いて述べられて居

り又其の他の章に於いては折に触れ述べられ、その存在論的価値と客観主義態度の表明を明らかにしている。今更説明の余地はない程明確に解明しているのであるが今一応トマスの定義する真理を一章に述べられたものに従つて総括して見ると次の様になると思う。

トマスに従えば、真理は本来的には我々智性の判断作用 (judicium) に於いて、即ち判断の裡に智性と事物との一致を立てる智性の裡に成立するのである。が二義的な意味で非本来的には「事物がそれに依存する智性との関連に於いて事物の裡に真理は存する」と考えるのである。

事物と智性との一致と云う場合勿論、智性は神のそれに人間のそれとの二様の場合が考えられるのであるが、我々の智性との一致の場合は神の智性との連関によつて成立する「存在するもの」(従つて又真なるもの)が予め確立されている場合に於いてのみ我々の智性と事物との一致適合が可能となり従つて又真理の定義に従うときこゝに始めてその「存在するもの」は「存在するもの」として認識され得、又「真なるもの」となるのである。我々の認識はその基準を事物に持ち、事物は又その基準を神の智性の裡に持つのである。それ故に存在論的見地からして一般に存在であるならばそれは神の智性にとつての最小の対象となるのであり又この智性にとつて絶対的に認識され得ない存在、絶対的非理性的なものは一つの非物 (Urding) となるのである。

ところで智性が把握されたものとしての真理を知解するのは智性の裡に於いてであるからして、我々の智性の場合、本来的に真理は智性の裡に即ち総合分析する智性の裡に存在するのである。我々が「存在するもの」「真なるもの」「或る物」として認識する場合、事物と我々の智性との一致とを認識する以前に神の智性との連関に於いて真となるものが前提されこの前提されたる「存在するもの」「真なるもの」との我々の智性の関連に於いて初めて我々の真理が

Veritas intellectus) が始めて語られるのである。

この判断の真理、智性の真理に於いても又、adaequatio の成立を見るのである。感覺的認識或いは單純知解 (simplex apprehension) は事実事物との一致をなしては居るが然しかゝる一致を認識する智性の真理を含まず従つてこゝに論ずる真理の定義からは除外されるのである。

“Veritas est principaliter in intellectus, secundario, in rebus, in ordine ad intellectum a quo dependet.”

x      x      x      x      x

さて虚偽に就いて述べるならばその存在論的見地からして、事物は神の智性に依存する限り事物の裡に虚偽は存しないのであり若しあるとすれば前述したる如くそれは「非物」を意味する事となるのである。が然しながら真なるものと虚偽なるものとが矛盾している限り、

第一義的に真理が存したところに又一義的に虚偽は存することになるのである。勿論これは本来的にはないが、(我々の智性との關係に於いて始めて生ずる) — 偶性的に条件的に事物の裡に然かも二様に見出されるのである。これらに就いては真偽論四章総べてに互つて述べられているので詳しくは述べない。感覺はその作用に於いては虚偽も真もあり得ずただ智性に外的事物の表象を与えるその際に虚偽なる意見を与える機因を作り得るのみなのである。それ故に虚偽はそれが本来的に依存しないところの、たゞ偶性的にのみ係わるところの智性との間に、然かもこの智性と事物との不一致に於いて始めて成立するのである。

“Verum et falsum opponuntur, ergo ubi primo est Veritas, ibi primo falsitas, ergo falsitas est in intellectu, et non in rebus nisi in ordine ad intellectum”

さて我々は「一応、真偽に就いてのトマス」の解する定義を総括して見たのであるがこれに続く十六論題五章―八章は、これまでの哲学的存在論的に解明されたものに從つて神学的な問題が論じられるのである。そして我々は又こゝにトマスによる神の真理に就いての見解の新らしさと深さを知らされるのである。彼はアリストテレスに從つて神の真理を智性主義的な意味で把握し、神の本質が神の本来持つてゐる智性に単に一致するが故に真なのではなく神は真理自身として解するのである。神の智性は他のあらゆる存在や真なるものの第一原理であるが故に被造物にとつては最初のそして最高のあらゆるものの規準的な真理と考えられる。(五章) それ故事物は存在論的真理の見地からして、神の真理の分有によつて又その限り真と考えられるのである。あらゆる事物はこの唯一の真理を模写しそれから一つの分有を自らの裡に担つてゐるのである(六章)。

勿論アンセルムスが熱情的に表明したる神の永遠性に就いてもトマスは見逃しはしない。トマスはこの真理の永遠性を神それ自らの永遠性に基づけるのである。前述の如く真理は智性のある関係なのである。それ故何ら永遠なる存在も存しないとするならば又如何なる永遠なる真理も存しないこととならう。神の存在の否認によつて「存在するもの」の無意味性が、從つて又真理の無意味が生じて来よう。

トマスはこの第七章に於いてアンセルムスのより適切なより温和な註釈者となる。勿論同様の事が真理の不変性に就いても、即ちこの神の智性と存在の不変性に基礎を持つところのこの真理の不変性に関しても―云われるのである。(八章) トマスが真理概念を神に移行するこの三、四章は特別の意味を持たぬかに思われるが実際にはトマスの全思想体系を支え我々が「智性主義」と見做すところの刻印を充分に示してゐるのである。

トマスに於いては、真理と智性はあらゆる存在の最高の極と考えられ、神が真理であるならば智性は人間が行使し得る最高の能力と考えられ、又この智性によつてのみ神を捉える事が出来ると考えるのである。とすれば被造的真理を通じての神の第一真理への渴仰の背後には神へのあこがれが存在し真理認識の可能性は非常に謙虚な姿にはあるが又非常に暗くにはあるが、神自身の認識の可能性を約束するのである。トマスが愛の裡にはなく智性の裡に——それをもつて神を把握する——人間の幸福性の本質を置かんとするとき、尚一層明確にこの智性主義が表われるであろう。

かゝる智性優位はトマスの世界観にも見られるのであるが、我々は今真理虚偽論に於いてその一端を窺う事が出来たのである。尚之れに就いては (P. Roussetot; *L'intellectualisme de St. Thomas*, Paris 1924) 参照されたし。

x            x            x            x            x

トマスの認識論は本質的に全くルネッサンス以後発展して来た認識論とは異なりそれ自ら完結して居り他の何らの哲學的理説を必要とはせぬのではあるが然し又「全く前提なき」ものではないのである。トマスは認識論を彼の形而上学の一部と考え形而上学の基礎の上に成立するものと考ええる。認識はトマスに於いては現存する三つの世界即ち創造的無限なる「神の智性」とそこから創られたる「神の世界」そして又そこから創造された「有限なる智性の世界」の三つを前提するのである。そしてこれら三つの世界の内的相異に従つて又認識の相異が考えられ所謂「認識一般」なる如何なる一般的定義も存しないのである。あらゆる認識は神の認識か被造物のそれかの何れかでありこの両者は一般的規定の下では理解されないのである。神の認識は存在するものの本源的な「内的所有」“*Inne haben*”であり人間のそれは「存在するものの内的生成」“*Inne Werden*”として考えられるのである。

x                    x                    x                    x

以上トマスの「真偽論」に就いて附足したのであるが、その前半に於いて哲学的存在論的意義を、その後半に於いてその哲学的意味を超えた神学的意義を紙幅のないまゝ極く簡単に述べて見たのである。之の「真偽論」の詳細な解説とその認識論的価値に就いて現代哲学の立場からの検討批判はこれを次の機会に譲りたいと考える。

尚原文には

Editio Piana (Romae 1570)

Editio Leonina (Romae 1882) を主として用いた。翻訳に當つては

A. Pegis; Basic Writing of St. Thomas, New York. 1944

Fathers of the English dominican Province; The Summa Theologica of St. Thomas, London. 1920.

註等に就いては、

Dominikanern und Benediktinern Deutschlands und österreichs; Vollständige, ungekürzte deutsch-lateinische Ausgabe der Summa Theologica. 2 Band. Salzburg. 1934.

尚 Editio Leonina に附された Cajetanus の Commentaria によつて十六論題一章、十七論題一章、と各々適切な説明を参照する事が出来た。  
(以上)